

音楽文化におけるたてまえ社会の弊害

吉永 誠吾 山崎 浩隆

Superficial Society Affects Music Culture

Seigo YOSHINAGA, Hirotaka YAMASAKI

(Received October 1, 2012)

はじめに

たてまえと本音という言葉は、表面に表す言葉や表情、あるいは態度が、心に思っていることと異なっているときにしばしば用いられる。この言葉はまた日本人独特のものであるようだ。また、日本人は形式を重んじる国民でもある。このような型式を重んじる日本人の特質が、時には大きな無駄となっていたり、本質を大きく曲げてしまっていたりすることがあると思われる。このような観点から本論文では無駄と思われるものや、本質とは相いれないような例をいくつか取り上げ、研究や教育の在り方に役に立てたいと考えたのである。

1 日本人と形式

日本人が形式を重んじる国民であるということは、少しでも外国に住んでみるとよくわかる。例えば学校を例に挙げると入学式、卒業式、始業式、終業式等があり、おごそかな雰囲気やセレモニーが執り行われ、校長先生はその都度、立派な式辞を述べなければならない。従ってそれらのセレモニーを乱すことは一大事件となるのである。もちろん、新しい学校に入学するときや新学期が始まる時に、これらのおごそかなセレモニーは、気を引き締め、決意を新たにする上で大きな効果をもたらすであろう。

このようなセレモニーは、果たして世界標準といえるのであろうか。よその国ではどの程度これらのセレモニーが重視されるのであろうか。吉永はドイツに留学し、子どもたちを現地校に通わせたことによって、これらのセレモニーが果たして私たち日本人が考えているほどに重要であるかについて疑問を持ったのである。

第一回目にミュンヘンに留学した時は、まだ日本人学校がなかったため、子供たちは現地校に通うことになった。そして土曜日だけ日本語補習校に通わせた。長男が高校1年、次男が小学6年、長女が小学2年であった。その時驚いたことは、日本で普通に行われている入学式や卒業式あるいは始業式、終業式などはなく、始まるべき時に子どもたちが学校に登校して授業が始まり、終わるべき時に終わって夏休みや冬休みが始まったことである。もうひとつ興味深かったことは、宿題がなかったことである。そこでどうして宿題はないのですかと聞いてみると、休みなのになんで宿題なんかするのですかとこの返事であった。日本人の先生方や保護者たちは、たとえ休み中であっても、子供が勉強しないことをえらく心配しておられるようだ。もしかしたら、うんざりするような宿題のために、子どもたちはますます勉強が嫌いになっていくのかもしれない。むしろ、休みだからこそ取り組めるような、学習意欲を高めるような活動を工夫すべきかもしれない。

形式がどの程度重要であるかについては、その国の伝統や習慣によってまちまちであることがこのことでよくわかった。日本人はおそらく、このような形式に対し大きなエネルギーを費やしているのではないと思われる。そのためのエネルギーは精神的なもののみならず、物質的なものも相当なものであろう。

もちろんこれらのセレモニーが全て無駄だと言うつもりはない。先にも述べたように新たな気持ちで新しいことにチャレンジするには有効であると言えるだろう。音楽科に大学院を設置する際に、器楽から教科教育に移った吉永としては、論文の数を量産することを余儀なくされた。その時の研究は吉永にとって大きな実りのあるも

のであったし、著書の重要な部分を占めている。いわば形式が中身をもたらしたとと言えるだろう。

しかし、このようなセレモニーの中にはほとんど形骸化し、意味のないものも数多くあるのではないだろうか。吉永は今年度をもって定年退職するが、35年間働いたその仕事の中には、しなくて済むのではないかと思われるものがずいぶんとあったように思われる。

2 FD 活動における疑問

吉永は現在、FD 委員会に所属して活動している。この FD 活動についていくつか疑問がある。

(1) シラバスの問題

シラバスというのは本来、例えば初習外国語のように、ほぼ等しい学力を持った学生に対し、15回の授業を通じて共通の授業内容を講義し、試験をして成績を出すためにあると思われる。しかし音楽は実技教科である。入学試験で実技試験を課しており、学生一人一人の実力は様々である。にもかかわらず、シラバスにおいて共通の授業計画を求めるといってはなはだ不合理である。例えば、ピアノを一つ例に挙げてみよう。ピアノを習い始めた年齢も様々であり、どのようなテキストでどのように学習してきたかも様々である。芸術とは個性的なものであり、技術的な問題のみならず、一人一人が表現するものは違って当たり前である。従ってその一人一人に合った指導法が工夫されねばならない。

(2) 初等音楽科教育における授業評価

吉永と山崎は初等音楽科教育の講義を前期1コマ、後期1コマ担当している。授業内容ではシラバスに沿って原理原則的なことを吉永が講義し、山崎が実践に役に立つような内容の講義を行っている。受講する学生数は常に百人を超える。従って学生一人一人がどのくらい理解したかを確かめるべく、毎回授業終了時に感想を書かせている。そしてその感想を授業改善に役立てている。この方法は時間と労力を必要とするが授業改善には非常に役に立っている。現在、大学で行っている、最後の授業の時に言うマークシート方式のアンケートよりはるかに効果がある。

(3) 様々な報告書のもつ意味

大学に限らず、どのような組織においても数多くの報告書が作られる。立派な業績を上げたことの証拠として書かれるのであろう。中には興味深い報告書もあるであろうが、書いた人しか読まないようなものも数多くあると思われる。いたずらに紙のごみを増やしているだけだといえよう。また、このようなものを書いたり読んだりしなければならぬことによって、本当にしなければならない仕事をする暇がないということもあるであろう。国政においても、事業仕分けの必要性が叫ばれ、無駄を省く努力がなされている。何が本当に必要で何が無駄か、よく検討されねばならない。

3 コンサートのプログラム

コンサートのプログラムについてはどうであろうか。日本では大規模なコンサートになればなるほど、そのプログラムなども豪華であるが、ヨーロッパでは著名な音楽家のコンサートでも、それほど派手ではない。それどころか、演奏会の内容だけが記されたような、質素なものも少なくない。このことだけを取り上げても、日本人はどうかするとその音楽の内容よりも表面的なものを重視していると言えるのではないだろうか。大切なのは音楽の演奏内容であって、プログラムはそのコンサートが行われたことを証明するだけで十分であろう。

名曲とされる音楽には、あるべきところに必要な音がそろっていると同時に、無駄な音など一つもない。その一つ一つの音に心をこめて演奏することが本当の音楽といえるのだ。最近、できるだけ早く終わってほしいと思えるようなコンサートが多いように思われる。本当の音楽を求めるといふより、名声や金銭目的がちらつくからではないかと考えられる。トルストイも述べているように、名声や金銭目的の芸術は本当の芸術とは言えない¹⁾。本当の芸術は利害損得によらない、純粋に内的動機にあふれるものであるはずだ。

4 音楽コンクールの問題

音楽コンクールは、クラス対抗で行われる校内合唱コンクールのようなものから、地方で開催されるコンクール、全国規模のものなど様々である。しかし、そのどれもが勝敗を目的としたものになってしまっており、音楽の本来の姿をゆがめてしまっている。ヨーロッパではコンクールでも数多くの聴衆が音楽の演奏そのものを楽しんでいることがマスコミによって報じられており、関係者しか演奏を聞いていないわが国のコンクールとの違いが浮き彫りになっている。

5 芸術と宗教

どの宗教に限らず、芸術と宗教の結び付きは深い。それは寺院の立派なことや、その寺院に飾られた彫刻や絵画の美しさなどからもうかがい知ることができる。吉永はすでに、建物の構造が西洋音楽の発展に及ぼした影響について述べた。残響豊かな寺院に響き渡る音楽は、人々のキリスト教に対する祈りの気持ちを深めるのに大いに役に立ったのであろう²⁾。これに比べれば、わけのわからないお経を長時間黙って聞かされている多くの日本人は、仏教を深く信じようとはなかなか思わないであろう。これこそが、単なる形式にすぎないと言えないであろうか。先日、卒業生の結婚式があったが、外国人の神父さんは、終始、わかりやすい日本語で話しておられた。最近の事件で特に印象深いのは、アメリカで公開された映画が、イスラム教を侮辱するものだとして中東やアジアで大変な事件に発展していることだ。表現の自由が保障されているはずのアメリカで起こったことであるにせよ、人々の宗教に対するエネルギーの大きさには驚かされる。

生命が生きようとするそのエネルギーの大きさには驚かされる。雑草はこんなところにもと思えるようなところに芽を出し花を咲かせる。あらゆる生物は、必死にその命をつなごうと努力している。宗教はそのエネルギーの表れなのかもしれない。そしてそれを表現しようとする芸術も、生きようとするエネルギーそのものなのだ。

6 いじめ問題に音楽は何ができるのか。

いじめは、大きな社会問題である。このいじめようとする心情には、人が人を差別しようとする意識があると思われる。世界の中にはいまだに身分差別のある国が存在するし、わが国もまた、歴史上、公然と身分差別のあった時代があった。この差別をなくすことを音楽で主張したのがベートーヴェンなのだ。子どもたちに音楽による感動体験の共有を通じて、温かい思いやりのある心を育てなければならない。この感動体験の共有によって人は互いに心をつなぐことができるのだ。NHKが放送した『地球大進化』を見ると、もしかしたら我々人類の祖先は、ある一人の母親なのかもしれない。

深く静まりかえった秋の夜、虫の音を聞いていると、虫も必死に生きようとして一生懸命歌っているように聞こえる。まさに、虫の生きようとするエネルギーそのものなのだ。40億年の生命の進化の歴史の中では、神が奇跡を起こした証拠などはどこにもない。もしあるとすればその進化を支えたエネルギーは何だったのかということだ。単なる微生物にすぎなかった私たちの祖先が、世界を知り、歴史を知り、科学技術を発展させ、素晴らしい芸術を生むまでに進化することができたことこそ、大いに不思議である。その不思議なものを芸術で表現しようではないか。

7 教科書の教材曲

「学校音楽、校門を出ず」という言葉は明治期の言葉であるが³⁾、学校教育が始まって100年以上を経た今日でもこの言葉は通用する。それだけ子どもたちを取り巻く音楽、子どもたちの好きな音楽と学校音楽とがかけ離れているのである。

山崎は、平成23年度に発行された小学校音楽の教科書の中に収録されている楽曲を、子どもの生活との関わり観点で整理し考察した。そこでは「音楽と生活とのかかわりに関心をもって」という2008年の中教審答申

が十分反映されているとは言えないことが明らかになった⁴⁾。学習者である子どもにとって好きとは言えない楽曲を学習しなくてはならないのである。学習指導要領では学校の全教科全領域で取り扱う道徳との関連も強くしなくてはならないとしている。この観点から教科書に掲載された歌唱教材の歌詞を見ると、明治期に「徳性の涵養」を目標とし歌詞の内容を刷り込もうとしたのとは異なり、子どもが思考・判断できるような歌詞の内容となっている。しかし、刷り込みとは異なるものの、道徳の内容に即した歌詞の教材が多く取り上げられている。教材曲、特に歌唱教材の歌詞の内容と道徳で設定した目標との連携を凶ろうとしているのである⁵⁾。このことは、歌唱教材の歌詞の内容はその多くが子どもたちの本音を反映したものではなく、望ましい態度や言動を示したものが多くなっているということである。中には、「あわてんぼうの歌」(まどみちお 日本語詞・ドイツ民謡)のように、子どもたちの生活をありのままに描写した教材はあるが、子どもたちの本音、特に不平不満や不安、怒りといった抑圧された気持ちを代弁するような歌詞の教材は見当たらない。それとは反対に、多くの学校で歌われている「ビリーブ」(杉本竜一作詞・作曲)ではくじけそうな友だちを支えることが歌詞に表現されているように、いわゆるあるべき姿、前向きな姿を表現している歌詞のものが多い。子どもたちは、生活の中でいろいろな音楽を耳にしている。多くの子どもが、その中に自分の好きな音楽・歌を持っている。それを決めるのに自分が共感できる歌詞の内容のものを理由にしている子どもは少なくない。共感がなくあるべき姿だけを示すことは、本音を吐露することができないことでもある。そのことが、学校音楽と子どもたちとの間に壁をつくっているのではないだろうか。

現在、小中学校における音楽科学習では、学習指導要領の目標に合致するものであれば指導者が教材を選択することができる。したがって、ここで教科書に掲載された教材曲を問題にしても教材を変更すればよいことではある。しかし、学校現場ではそのように目標をより達成できそうな教材を探し、その指導方法を研究するといったことは余裕がなくなかなかできない。実際には教科書の教材を使って指導していくことが多い。そうしたとき、子どもたちは音楽で本音を表現することができず、学校と子どもたちの現実の間に大きな壁をつくってしまうのである。そして、その壁が学校音楽を子どもの生活の中に引き入れることを拒み、対抗文化となる音楽を醸成することにもつながることもある。

そのような壁をつくらないためには、多くの子どもたちが生活の中で抱くであろう不平不満などの抑圧を受ける感情に共感しつつ、それを乗り越えていくという内容を歌詞にした曲が教材として教科書に掲載されることが望まれる。しかし、それを待っていては壁が大きくなるばかりである。そこで、教材曲を教科書以外のものから選択することが有効であろう。そして、小学校ではアニメの主題歌等に選択の幅を広げ、その中から目の前の子どもたちの本音を代弁しているようなものを選択することで学校音楽と子どもたちとの間の壁をなくすことができるのではないかと考える⁶⁾。

8 テスト・評価

音楽でもテスト・評価が行われる。教科としての学習指導であるから評価をするのは当然である。問題は、その方法である。この4年間、小学校教員養成課程の必修科目である初等音楽科教育の授業で、学生にアンケート調査を行っており、義務教育の音楽の授業の中で最も嫌だったことをその項目の一つとしている。その回答で圧倒的に多いのが「歌あるいは楽器のテスト」である。つまり、音楽科学習における評価とはいったい何かということを考えさせられる調査結果である。評価についてはいろいろな考え方はあるが、学力を低下させるためのものでないことは確かである。音楽科学習では、身体を使って表現することが学習の多くを占める。身体を使う際、嫌いだ、やりたくないという感情が膨らんでいて果たして学力は高まるだろうか。身体と感情は密接につながっていることからするとそれはかなり難しいことだろう。

学習者である子どもたちは、歌や楽器のテストはやめてほしいと思っているのだが、指導者である教師からすると学習指導に評価は必須である。教師の中には、この「テスト」が子どもたちの心理的に大きな負担となっていることから、個別に別室で行う人もいることが調査の中でわかった。しかし、学習者側からすると若干の負担は減るがそれほど大きな差は感じないというものが多い。音楽における技能の評価方法はテストだけしかないのだろうか。評価そのものをどうとらえるのかという評価についての理念を音楽における技能評価について明確にすることも重要だが、「テスト」という評価方法に対する嫌悪感を学習者がもっているのだから、評価方法と評価観をセットで改めなくてはならないだろう。

技能の評価は何のためにするのだろうか。現在実践されているものの多くは以下の3つである。

- (1) そのでき具合を量的に表現する
- (2) そのでき具合に対してさらに高めるための指導・助言や不十分な点を補うための指導・助言を行う
- (3) 前回と比較し、その高まりを認め励ます

学習者が負担に感じている「テスト」の多くは、(1)ででき具合を量的に表現する、つまり、技能を数値化することであり巧拙によってランクを決める評定なのである。指導者が評定を行うのは通知表や指導要録の記載および提出のためである。職務として必ず行わなくてはならないことである。(2)と(3)は、教師として行うべきことではあるが、提出等が義務づけられているものではない。これらのことから、「技能評価」はでき具合の数値化ということになってしまう傾向にある。

しかし、量的に表現することは不要なことではない。学力としての技能がどのくらい身についたのかを学習者本人や保護者に伝えるためには量的な表現が分かりやすい。いわゆる評定が行われるのもそのためだろう。問題は、教師の評価観が(1)の数値化すること、量的な測定・表現に偏っていることである。本来、音楽表現は表現者の思いや意図を伝えるために行うものである。ところが、学校では測定され数値化されるためだけに表現をしなくてはならない場合が多い。そうではなく、まずは学習者の高まりを認め励ますことを行い、そしてそれぞれの技能に応じた指導・助言を行うべきではないだろうか。指導・助言を行うには専門的な知識が必要になるが、認め励ますことは指導・助言を行うことに比べれば専門性は必要ない。学級担任であってもできるだろう。それらを繰り返し、そしてそれを記録していくことによって量的な表現はできるはずである。

評価方法について見てみると、その問題は「テスト」という形式にある。一人で教材曲の全部を演奏しなくてはならない、技能の巧拙を楽曲の長さの分、曝け出さなくてはならないということが学習者の負担となっているのである。一人で演奏する、曲の全部を演奏するという2つのことが問題だと考えられる。この2つを解消すれば、学習者の負担は軽減されるはずである。そこで以下のように2つの問題点のうち各々を解消するような改善案を提案する。

まず、演奏する子ども以外が聴取者になるという形式の解消である。そのような、日々の授業の中で一人一人を見ていく場を設けるようにする。音楽では集団で表現をすることが多い。子どもと一定の距離をもち、集団としての表現を見ていては、個の表現を見ることはできない。そこで、CD等の機器を使って伴奏をすることで教師は一人一人の子どもに近づくことができるようになる。表現している子どもに教師が近づいて評価していくという机間指導を用いることで、学習者にとって表現しているのは一人ではないが、評価者にとって対象となる学習者は一人という場をつくり出すようにするのである。

もう一つは、演奏するのは一人だが曲の全部ではなく一部を演奏させるという方法である。1フレーズや1小節等の学習者が大きな負担に感じない程度の長さを演奏させるのである。

山崎は、この2つの方法を使い小学校の音楽科教育で評価を行ってきた。子どもたちはほとんど心理的な負担を感じなかったようである。それでいて、先述した評価を行うことができた。音楽の学習では歌や楽器のテストをするもの、という既存の考えを改め、子どもたちが技能の高まりを自覚し認められることから意欲を喚起し、さらに練習に取り組んでいくような指導方法を考え実践していく必要があるだろう。

注

¹⁾ トルストイ、河野与一訳『芸術とは何か』、岩波書店、1967年、p.11~12

²⁾ 吉永誠吾『音楽とコミュニケーション』熊本日日新聞情報文化センター、2006年、p.67~75

³⁾ 山住正巳『唱歌教育成立過程の研究』東京大学出版会、1967年、p.5

⁴⁾ 山崎浩隆「小学校音楽科教科書における『音楽と生活とのかかわり』に関する一考察」熊本大学教育学部紀要 第60号 人文科学、2011年、pp.201-207

⁵⁾ 道徳と教科の関連について、それまでに出された学習指導要領では総則で述べられるだけだったが、平成20年学習指導要領では、各教科の指導計画作成に当たっての配慮事項の中にも述べられており、前回までと比べると一歩踏み込んだものとなっている。

⁶⁾ 山崎浩隆「小学校音楽の教科書教材における音楽と道徳の関連についての一考察」熊本大学教育実践研究 第29号、2012年、pp.87-92